

## 第 8 回大会発表者・講演者の氏名・テーマ・要旨

2月27日(土)

[発表]

### 1. 福田翔(富山大学)・許臨揚(蘇州科技大学)

テーマ: 日本語母語とする初級中国語学習者の自由作文に見られる語順の研究

要旨: 本研究は、日本語を母語とする中国語学習者による「中国語自由作文データ」を用いて、特に初級学習者に顕著に見られる語順の傾向について考察を行う。具体的には、語順の傾向について問題となるタイプとして、次の3点について考察を行う: 「(1) 時間や場所を表す副詞的成分の位置」(元データ: 我学习工学从我是高中生。→添削: 我从高中阶段就开始了工学的学习。「私は高校時代サッカー部に入っていました。）」、「(2) 述語の時間順原則」(元データ: 我喜欢長野, 所以将来想当药剂师在長野工作。→添削: 我喜欢長野, 所以将来想回長野做药剂师。「私は長野が好きです。だから、将来は薬剤師になって長野県で働きたいと思っています。）」、「(3) 情報構造」(元データ: 我喜欢吃, 饺子特别喜欢。→添削: 我喜欢吃, 特别喜欢(吃的是)饺子。「私は食べるのが好きで、特に餃子が好きです。」) 考察について、上記の「中国語自由作文データ」と同様のテーマ及び規模である中国語を母語とする「日本語作文データ」からの用例(中国語母語話者が産出した日本語の文の傾向)との対照、ならびに中国語と日本語の文法構造の相違という観点から質的分析を行う。

### 2. 胡敏男(北京語言大学東京校)

テーマ: 初級レベルにおける存現文の教え方について—「出現・消失」を中心に—

要旨: 「はじめに」中国語の「存現文」というのは、「人」や「もの」の存在、出現、消失を表す文である。「存現文」の教授法を調べた結果、「存在」を表す“在”構文、“有”構文と“着”構文についての研究はほとんどである。しかし、「出現・消失」を表す「存現文」の教授法に言及するものは少なく、まだまだ研究の余地があると思われる。

本稿では、存現文の「出現・消失」表現に注目し、初級の段階での教え方について提案を行う。

「教授難点」中国語学部一年生前期の練習にこんな問題があった。

我们几同学来又班了个新(順番並べて文を作る)

授業で何回も説明したにもかかわらず、不正解者が20人中12人いた。説明方法の改善が求められることを実感した。

「初級レベルにおける存現文の授業案及び実践」本稿では、まず中国語学習者が間違いやすい問題に注目し、解決したいと思う。

1. 語順について 「存現文」の語順について、「場所・時間+動詞+人・もの」というのを学生に提示する教材が多い。しかし、学生は公式を機械的に記憶しているだけで、語順に影響する要因については理解していない。そこで、授業の時に「中国語では最初に出てくるものは既知のもので、未知のものは後から出てくるというルールがある」ということを学生に説明した。さらに、映像などの生教材でそのルールを支える認知過程を分析し、浸透させた。

2. 語用について 初級の段階では、「出現・消失」表現を使用する場面はまだ少ないと思う。平叙文と存現文は語用の面について、オンライン授業を活用しながら、様々な場面を比較してみた結果、それぞれの使い方への理解は深まった。

### 3. 畢文涛・王天予(北京語言大学東京校)

テーマ: 実例で説明する中国語文法指導テクニックの応用—“就”と“才”を例にして—

要旨: 日本の大学における外国語学習者を見ると、英語の次は中国語の学習者が一番多いと言われ、中国語学習がブームと言えるこの十数年、学習側の状況は以前より大きく変化してきた。第二外国語として選択する履修者が増えるほか、専攻として中国語学科を設ける大学も増えてきたと見られる。数多くの教育者から、多様な教授テクニックはどこにどうやって使うかなどについて、具体的な応用手法を研究すべきだという声がかかってくる。そこで、我々は教育現場に立っている指導者として、ノウハウの共有と検

討がとても有意義なことだと考えている。

本稿では、2015年から現在に渡って北京語言大学東京校で実施した初級中国語学習者を対象とした文法授業における直接法任務型授業の試みについて報告する。多くの初級日本人学習者が戸惑う時間副詞「就」と「才」を例にして、日本人学習者の誤用した要因をまとめた上、語意、構文規則と使用場面の三つの教学プレートで、誤解を避け、正解に導く有効的且つ効率的な教え方を検討する。また、北京語言大学本校のモデル授業と東京校における実践との対照を通して、日本人学習者の特徴を明らかにし、それに応じる有効的な指導法を提案する。

#### 4. 任菲(大東文化大学・院)

テーマ: 近代日本人編纂上海語教科書における“拿”構文

要旨: 上海は1843年開埠後、都市の近代化が加速し、貿易などの為に訪れる欧米人や日本人などの外国人が大量に増えた。地元の人と交流できる為、上海語の教科書が編纂され、日本人のため編纂・出版したものが多数現存する。それらの教科書は出版年代が20世紀の初期から30年代末期にわたり、その時期の上海語を如実に記録しており、研究の価値が高い。

今回の発表はこれらの教科書を言語資料として上海語の“拿(ne)”構文を研究する。上海語の“拿(ne)”は「普通話」の動詞“拿”の意味がある上に、“把”構文のように介詞の文法機能もある。筆者は近代日本人編纂上海語教科書の9冊における“拿(ne)”構文を全て整理し、近現代の30年間における上海語の“拿(ne)”構文の使用状況を究明したい。

近代日本人編纂上海語教科書:

1. 『上海語独案内』(1904), 杉江房造, 日本堂書店。
2. 『滬語便商』(1908), 御幡雅文, 日本堂書店。
3. 『滬語津梁』(1907), 御幡雅文, 文求堂書店。
4. 『瀛滬雙舌』(1914), 林通世, 日本堂書店。
5. 『活用上海語』(1924), 大川與朔, 志誠堂書店。
6. 『實用上海語』(1933), 喜多青磁, 春陽堂。
7. 『上海語指南』(1936), 稻葉鼎一郎, 文求堂書店。
8. 『詳註現代上海語』(1936), 影山巍, 文求堂。
9. 『實用速成上海語』(1937) 影山巍, 文求堂。

#### 5. 周歴(大東文化大学大学院)

テーマ: 《廣韻》の増訂部分と《玉篇》の関係—《王韻》との比較に基づいて

要旨: 《玉篇》は南梁大同九年(543)顧野王が編纂した漢字の部首順の字書であり、約8分の1の約2000字しか現存していない。北宋の大中祥符元年(1008)に陳彭年らによって増訂された《大廣益會玉篇》(《宋玉篇》と略称)は全30巻で構成され、所収字は22000余字である。

《切韻》は隋の仁寿元年(601)に陸法言が四声の193韻によって編纂された韻書である。該書は現存せず、唐の神龍2年(706)に王仁昫によって改訂を加えた《刊謬補缺切韻》(《王韻》と略称)は全5巻の構成で、所収字は18000余字である。北宋の大中祥符元年(1008)に陳彭年らによって増訂された《大宋重修廣韻》(《廣韻》と略称)は全5巻で構成され、所収字は26000余字である。

《廣韻》は《王韻》の増訂版であり、また増訂中、当時最大の字書《玉篇》を利用したことが想定される。本稿は《廣韻》の増訂部分と《玉篇》の関連を解明するため、《廣韻》第五卷入声巻の資料を利用する。《廣韻》入声巻に所収する5410字に対して、《王韻》入声巻の約3500字が含まれる。残りの約1900字のうち、約1300字が《宋玉篇》に所収する。本稿は《王韻》《廣韻》入声巻の所収字、音注、釈義を比較し、《廣韻》の増訂内容と増訂手法を整理・分析を行う。その上《廣韻》の増訂部分に対して、《玉篇》残巻、《篆隸萬象名義》、《宋玉篇》などの音注、釈義と比較し、《廣韻》の増訂部分と《玉篇》の関連について解明を試みる。

#### 6. 胡春艶(大東文化大学・院生、東北石油大学)

テーマ: 中国語の形容詞と程度副詞の関係性—『紅樓夢』前八十回を中心に

要旨: 現代中国語の形容詞と程度副詞は程度性において強い共起関係にあり、伝統的記述文法では、こ

れまで以来、程度副詞と共に起できるのが形容詞であり、この点において、名詞と動詞の分かれ目としている。朱徳熙（1956、1982）は、形容詞を性質形容詞と状態形容詞とに分ける。程度副詞との共起関係を基準として形容詞を見た場合、性質形容詞にはこの基準が適用可能であるが、状態形容詞には適用できないものと考えられる。

しかし、程度副詞も状態形容詞とある一定の繋がりがあることが指摘される。程度副詞との共起は、性質形容詞、特に単音節形容詞のコロケーションのプロトタイプ特徴である。程度副詞と状態形容詞はすべて形容詞の程度量を表す量化手段として、主観と客観、等級性、相対と絶対の面で共通点と相違点が見られる。本発表は、程度副詞の特徴を踏まえて、程度副詞と形容詞の関係を通して、認知の面から、形容詞の特徴を明らかにする。『紅樓夢』を言語資料として、特にそのうちの状態形容詞の代表的な形容詞重畳式は、量化手段とする程度副詞と比較することにより、『紅樓夢』における形容詞重畳式の特徴を明らかにすることを目的として、形容詞重畳の動機付けを探究する。

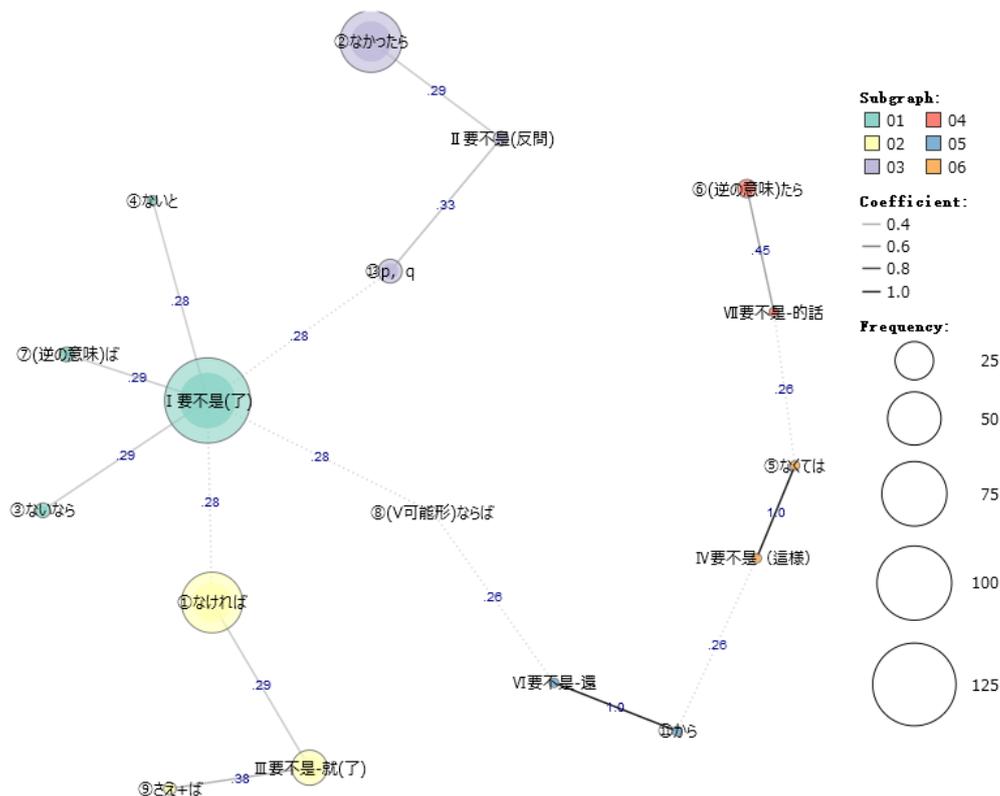
## 7. 劉志穎(大連理工大学・院)

テーマ：反事実仮定文の日中対訳研究 — 「要不是」に訳される日本語文型を中心に

要旨：趙海城（明星大学）・李光赫（大連理工大学）先生が計量国語学会 第63回大会における学会発表では「要不是」に訳される場合は必ず反事実の役割を果たしているという研究結果を発表した。「要不是」は中国語で日常生活には多く使用されていれば、文学作品にもよくあらわれる文法であり、反事実仮定は使用頻度が最も高いよう法である。こういった点を踏まえて、本稿はコーパスに基づき、コーパスに収録されているデータを分類して分析し、「要不是」に訳される反事実仮定文日中対訳関係を考察することにした。

李晋霞（2018）は「要不是」を直陳条件句（直接述文）、选择条件句（選択条件文）、假转条件句（仮設逆接文）、违实条件句（反事実仮定文）と分けている。反事実の解読路線を考察し、正推式违实句（正順関係反事実文）、倒推式违实句（逆順関係反事実文）、评价式违实句（評価用反事実文）と分けている。

本稿考察は、大連理工大学李光赫先生によって整理されたコーパスで考察を展開した。「要不是」に訳された40部の日本語文学作品から「要不是」をキーワードにして検索してみると総計658237件のデータの中では「要不是」に関することは171件、反事実文は160件。考察はデータをkh coderの共起ネットワーク図にして、中国語と日本語各パターンとの関係を明らかにした。



## 8. 孟慧(専修大学・非)

テーマ: 事実条件文の述語動詞に関する調査と考察

要旨: 現代日本語の条件文には、過去に1回の事態が成立したことを意味する場合がある。このような条件文を事実条件文という。事実条件文は「たら」「と」によって表されるという。本研究は、事実条件文を「連続」「きっかけ」「発見」「発現」「時」という5種の用法に分けている。また、豊田(1978)では、接続助詞「と」について機能によって用法を分類している。事実条件文にあたる用法は、前件と後件の述語動詞について考察が行われている。豊田氏は「と」形式の事実条件文の用法や特徴を詳しく述べているが、「たら」形式の考察が行われていない。筆者は過去の研究で、豊田氏の論を踏まえ、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)コーパス検索アプリケーションの『中納言』を利用して「連続」と「きっかけ」用法の「と」と「たら」形式の事実条件文における前件と後件の述語に対して考察を行った。本研究は、これに引き続き、「発見」、「発現」と「時」用法の事実条件文について調査し、5種全てについて考察を行う。特に述語に現れた動詞に注目し、前件と後件に現れる述語の数量的分布と意味的な性質の傾向を分析して「と」と「たら」文の違いを検討する。

## 9. 朴徳華(大連理工大学・院)

テーマ: 重複型デモ文における日中対照研究

要旨: 従来、複文についての研究はほとんど両言語の各自の枠内に置かれてきたし、重複型複文のみに重点を置いて行われた研究もまだ少ないと言える。さらに、日中対照の視点から重複型「デモ」文とその中国語訳との対応関係についての研究は管見の限りないのである。

複文の研究において、「デモ」は逆接条件を表す典型的なものだと言える。従来の研究によると、「デモ」の意味用法には主に逆条件、条件の並列、疑問語と共に、反事実的条件文と事実的条件文という、四つの用法がある。

本稿では、「～デモ～デモ」の意味・用法を考察し、『日中対訳コーパス』を利用しながら、日中対照の視点から重複型「デモ」文の中国語翻訳傾向を明らかにするのを本研究の目的とする。

コーパスからヒットした重複型「デモ」文の言語例を6種類に分類し、それぞれのパターンに対応する中国語複文の文型を11種類に分類した。データ分析した結果、重複型「デモ」文は中国語の並列句や、譲歩句に訳すものが多いことが分かった。

## 10. 王瑞敏(上海外国語大学・院)

テーマ: 「多い」の連体修飾用法について—「多い+N」「多くの+N」の比較を中心に

要旨: 「多い・少ない・遠い・近い」などのような物事の属性・性質を表さない形容詞は連体修飾において様々な制限があり、従来多く注目された。日本語初心者も名詞を修飾する際に、「多い」ではなく、「多くの」を用いると教えられてきたが、実はまったくそうではないようである。例えば、

(1) (\*オオイ 多くの) 人が集まっている。 (森田: 1991)

(2) (遠い 遠くの) 親戚より近くの他人。 (森田: 2008)

のように、連体修飾用法において、これらの形容詞は「連体形+N」と「連用形+の+N」という二種類の形態があり、それぞれ一つの形態しか使えない場合と互いに取り換えて使う場合がある。本稿は「多い」の連体修飾用法に着目し、①連体節になる場合②比較構文の場合及び③単独で使う場合において、「多い+N」と「多くの+N」の用法差を考察した。また、沢田(1992)が発話機能の視点から提示した「指定」「非指定」の概念に基づき、「多い」と「多くの」が名詞を限定修飾する際の機能分担が明確された。要するに、前者は連体節になる傾向が強く、特に「名詞+助詞+多い」の形で後接名詞を表す物事の内在的属性・性質を描写する「限定性」を持つのにに対し、後者は単独で使う場合が多く、後接名詞を表す物事の量的特徴を描き、「指定性」の機能を担うことがわかった。

## 11. 許瑶瑶(上海外国語大学・院)

テーマ: 結果目的語構文に関する再考察

要旨: 従来の研究で言われている典型的な「結果目的語」は「家 (を建てる)」、「穴 (を掘る)」、「お湯 (を沸かす)」、「小説 (を書く)」のような結果産物(N)に限っている。本文は「結果産物(N)」だけではな

く、「結果事態 (VN)」も結果目的語の範疇に入れるべきだと考える。二種類の「結果目的語」構文の意味特徴を再検討したいと思う。

#### 1. 結果目的語 1=結果産物 (N)

目的語にとつたヲ格名詞がモノ名詞で、何らかの活動によって作りだされる産物を表し、生産性活動が終わっても具体的な結果産物が残される。さらに二つのタイプに分けられる。

一つは直接的に動作/作用の働きかけを受ける原材料が存在するタイプ。例えば:「家を建てる」。もう一つは直接的に動作/作用の働きかけを受ける原材料が存在しないタイプ。例えば:「字を書く」。

#### 2. 結果目的語 2=結果事態 (VN)

目的語にとつたヲ名詞がすでに動作概念を含む動名詞 (コト名詞) で、何らかの活動の結果作りだされる事態を表す。この場合、動詞は事態の出現・成立だけを表し、文法的な機能を果たす形式動詞 (機能動詞) が多い。例えば:「ホームランをする」「あくびをする」など。また、「歌を歌う」のようないわゆる「同族目的語」も結果目的語 2 に属する。結果目的語 1 と違って、いったん動作が終わったら結果事態も同時に終わって、具体的な結果産物が残されていない。

### 12. 劉玉玲(上海外国語大学・院)

テーマ: VにV構文における動詞Vの使用に関する一考察

要旨: 日本語には「考えに考えた」、「待ちに待った」のような同じ動詞が反復する表現が数多く存在している。しかし、「考えに考えた」、「待ちに待った」のような表現がよく使われている一方、「見に見た」「勉強しに勉強した」のような表現は見つからなかった。どんな動詞がVにV構文で使えるか、どんな動詞がVにV構文で使えないか。本研究は構文文法の視点から、VにVという枠組みを一つの構文として認めた上、VにV構文に適用する動詞のルールを考察することを目的としている。BCCWJ で用例を見出して観察した結果、筆者は以下の二つの仮説を立てている。①持続可能な動作動詞はよく使われている典型的な動詞で、動作性と状態性を両方持つ動詞も使えるが、完全な状態動詞は使えない。②VにV構文はもともと形式と意味が慣習的に結びついた単位であるが、それは主に程度の激しさを表すか、あるいは時間の持続の長さを強調するかは動詞の意味分類と深く関わっている。つまり、VにV構文の意味と動詞の使用とは相互制限しあう関係である。本研究は以上の二つの仮説に基づいて、動詞がVにV構文で使えるか使えないかを影響する要因を探し、そのルールを明らかにしようとしている。

### 13. 蘇秋韻(日本グローバル専門学校・非)

テーマ: 《水浒传》に現れる“过”の用法について

要旨: 現代中国語における動詞“过”の語義を説明する場合、“过桥”、“过河”、“过年”、“过节”(橋を渡る、川を渡る、年が明ける、祝日を過ごす)など空間、時間を賓語とする連語、単語がしばしば典型例として挙げられる。これらの動賓構造を対象とする研究に見られる共通点として、「通過義」を“过”の基本義とすることが通例であるように思われる。本稿は中国明代万暦年間に成立した長編白話小説で四大奇書の一つでもある『水滸全傳』を言語資料として、その中に現れる“过”の用法を分析し、その結果、中国明代の言語資料に“过”の「到達義」が存在することを報告する。実例による語義の分析に基づいて、“过”の「到達義」と「通過義」との関係を探ることを目的とする。

### 14. 馬雨童(上海外国語大学・院)

テーマ: 連体修飾節の日中対照研究—非限定的修飾を中心に

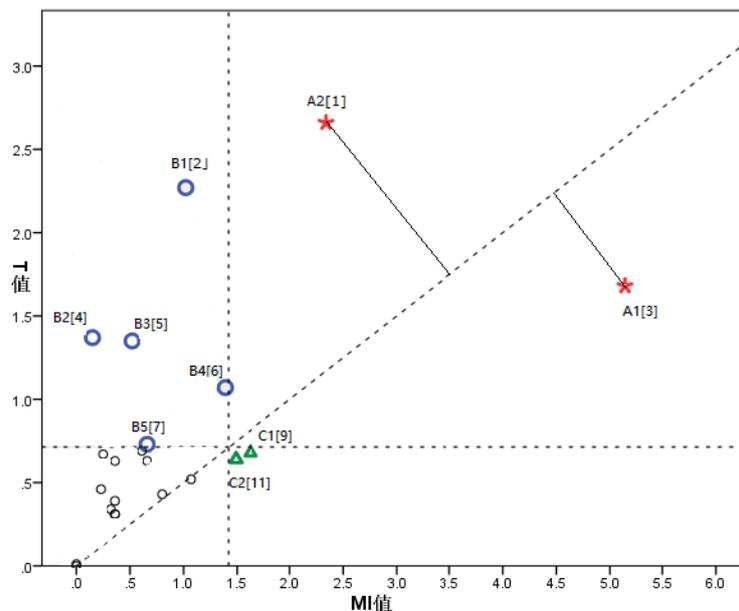
要旨: 日本語の連体修飾構造については、既に豊かな先行研究の蓄積がある。それは、連体修飾構造が、連体修飾要素と被修飾名詞句との複雑な意味関係から構成されるために、述語と名詞双方の分析に対し、多大な成果をもたらす領域と考えられてきたからである。それに対して中国語は、日本語と比べて連体修飾節が一段と少なくみられると言われている。一般に、日本語の連体修飾節の多用と中国語の連体修飾節に関する制限について、日本語の方が中国語より連体修飾の形式をとりやすいからとされてきた。両者にどのような違いがあるのかということも指摘されているものの、なぜそうなのか必ずしもまだ十分に解明されてはいない。本研究はこれまでの研究を踏まえたうえで、対訳テキストで非限定的連体修飾節における日本語と中国語の共通点と相違点を文法構造、意味特徴、機能の面から分析し、なぜ日中両言語にこのような傾向があり、文法構造や意味特徴、機能の面からも説明を試みた上で、その背後に潜んでいる原則を明らかにしたい。

## 15. 王瀚瑩(大連理工大学・院)・李光赫(大連理工大学)

テーマ：関数検定から見るラシイ形式についての翻訳傾向の計量研究

要旨：従来の研究では、ラシイそのものの意味用法についての研究が多いが、日中対照研究及び翻訳傾向に関する研究が少ないで、特に共起する表現という側面から見る翻訳傾向である。そこで、本研究では、李光赫(編)「日中文学作品対訳コーパス」から抽出される文を先行研究に基づき、よく共起する日本語表現に沿って分類し、中国語文法に関する研究も参考して、中国語の翻訳パターンを分類するように、証拠性を表すモダリティ表現のヨウダの対訳傾向を考察すると同時に、辞書が限られた翻訳形式などを拡張して、日本語教育に新しい視点を提供したいと思う。

図1 ラシイについて T・MI スコアの散点図



結論として、ラシイには「ドウヤラ+ラシイ」は「…吧」と相互の関連度が最も高く、「看来」に翻訳される場合も多い。なお、「ドウヤラ+ラシカッタ」の意味情報が多く含まれている中国語形式は「看起来」であるという結果が得られた。

2月28日(日)

[発表]

## 1. 楊怡璇(西安外国語大学・院)

テーマ：高校生向けの日本語教育方法の研究

要旨：近年、中国において高校生向けの日本語教育は盛んになった。日本語も中国の大学の入学試験の一つの選択肢になった。昔は日本語をはじめとしている英語以外の少数語種の習得対象は18歳以上の大学生だった。高校生は大学生と違って、新たな知識を受ける能力と多様な科目への勉強時間も違っている。それによって、高校生向けの日本語教育の方法も違ったほうがいいと思う。

そして、日本語は中国人の学生たちにとって、一番難しいのは文法だと思う。中国語と英語の語順は同じだけど、中国語と日本語の語順は違っている。中国語の言葉と日本語の言葉、書き方が同じけど、意味が全然違っているのは多いです。書き方が同じけど、意味が似ている言葉も多い。

今回の発表は主に日本語の教育を進むときに、言葉の教育方法をターゲットし、学生の年齢や性別や習得能力などによって、多様な教育方法を研究したい。日本語、英語、中国語三種の言語も言葉、語順の方面から比較しながら、その教育方法を研究したいと思う。自分の13年間の日本語の勉強経験を通して、中国の高校の日本語教育において、最後に自分的なアドバイスなどを提出したいと思う。

## 2. 凌飛(専修大学・非)

テーマ：日本語教育において「じゃん」を学習項目とする必要性について

要旨：「じゃん」は静岡で生まれ、西は愛知県、東は横浜・東京に広がり、さらに福島県までに拡大し

たと言われ、かなり広い範囲で使われている。本研究は共通語で使われている「じゃん」を研究対象とする。「じゃん」は「(の) ではないか」の類似形式であり、両者は完全に重ならないが、似たような意味・用法を持っている。しかし、日本語教育において、「(の) ではないか」を学習項目として扱うことはあるが、「じゃん」を学習項目として扱う教材は管見のかぎりまだない。これは学習者にとって非常に不利である。

まず、「(の) ではないか」の用法が多く存在しており、学習項目となっている教材もあるが、その用法を網羅する教材はほとんどないため、学習者はそれをマスターするのが困難である。そして、「(の) ではないか」にはバリエーションも多く、しかも各形式は使用場面、意味・用法などの面において、必ずしも一致するとは限らないため、それを区別するのも難しい。さらに、「(の) ではないか」形式の意味・用法を把握することができなければ、類似形式である「じゃん」を理解するのは無理があると思われる。最後に、「じゃん」は日常生活においても、放送されているドラマ、バラエティー番組においても、さらに学習者と密接な関係のあるN1-N5の試験問題にもよく表れる。

本研究はまずコーパスを使用し、「じゃん」の使用実態を調査する。そして、教材を調査し、「(の) ではないか」をどのように扱われているかを把握する。最後に教材において、「(の) ではないか」の用法の補足、特に「じゃん」をどのように扱えばいいかについて提言したい。

### 3. 賈兆昆(清華大学・院)

テーマ：日本語様態存在文における名詞項に関する一研究

要旨：従来、日本語における「存在文」は、以下のような例文を指している。

- (1)机の上に花瓶がある。
- (2)体育館の中に学生がたくさんいる。
- (3)世界にたくさんの言葉が存在する。
- (4)人々の心に希望と愛がある。

これらの例文が「N<sub>1</sub>にN<sub>2</sub>がV」という配列になっており、文の述語として「ある」、「いる」と「存在する」三つの動詞が選択でき、N<sub>1</sub>、N<sub>2</sub>、Vがそれぞれ存在場所、存在主体、「存在」の概念を提示し、文全体が「ある場所にあるものが『存在』という状態にある」という事態を表している。

そして、実際のコーパス、現代日本語書き言葉均衡コーパス中納言を使用した調査において、下記のような例文が日本語に多数存在していることが明らかになった。

- (5)門の前に男がひとり立っていた。
- (6)座敷に男と女が向かい合って坐っている。
- (7)入口の左のベッドに黒田さんが寝ていた。
- (8)清らかな用水に鯉が泳いでいた。

これらの例文は主体の存在の「あり方」、すなわち存在の「様態」を表しており、非典型的な存在文として、「様態存在文」と名付けられている。様態存在文は、形式と意味の両面において、存在文と類似しているところが多いが、文末の動詞述語に関して両者が異なっている。存在文は「ある」、「いる」、「存在する」三つの動詞を述語としているが、これらの動詞が存在物の類別(有生/無生)による違いを除き、述語として同じく「存在」という概念を表している。それに対し、様態存在文は、存在主体の異なる存在様態により、様々な動詞が述語として、存在の意味のみならず、存在主体の様態も表している。また、様態存在文における二つの名詞項、「ニ」格名詞項と「ガ」格名詞項に関しても、存在文に見られない特徴が存在している。本研究は認知言語学の視点に立ち、コーパス調査を通して、様態存在文における「ニ」格名詞項と「ガ」格名詞項の二種類の典型的な相対的關係、「充滿型」と「鳥瞰図型」を発見し、それに関係する事態認識上の認知的特徴への分析を試みる。

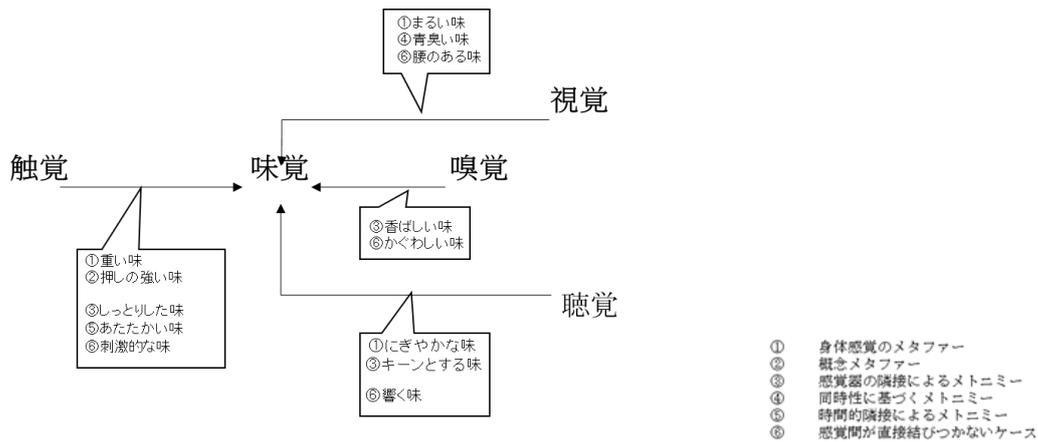
### 4. 武藤彩加(中部大学)

テーマ：おいしさを表す五感の表現とその動機づけ

要旨：共感覚的比喩の動機づけを隠喩(メタファー)によるものとするものには、ウルマン(1972=1969)や池上(1985)などがある。同様の主張は、先行研究の中で最も多くみられるものであり(山田1993、国広1967など)、その中には共感覚的比喩をメタファーの下位カテゴリーに位置づけるものもある(cf. ウ

ルマン 1972=1969、および Taylor1995)。一方、小森(1993 : 59)は、共感覚の動機づけについて「意味関係における類似性というよりは、現実のなかの隣接性によって結びついていると捉えたほうがよいのではないか。(中略)その意味で、これは嗅喩にもとづいた表現とみることができる」と指摘する。本発表では、共感覚的比喻の中でも五感内において味覚以外の感覚が味を形容する味覚の共感覚表現に注目し、武藤(2015)をふまえ改めてその動機づけを探る。瀬戸(2003)で示されている144例の味覚の共感覚表現を考察の対象とし検討した結果、味覚の共感覚表現には次のような動機づけがみとめられることがわかった。

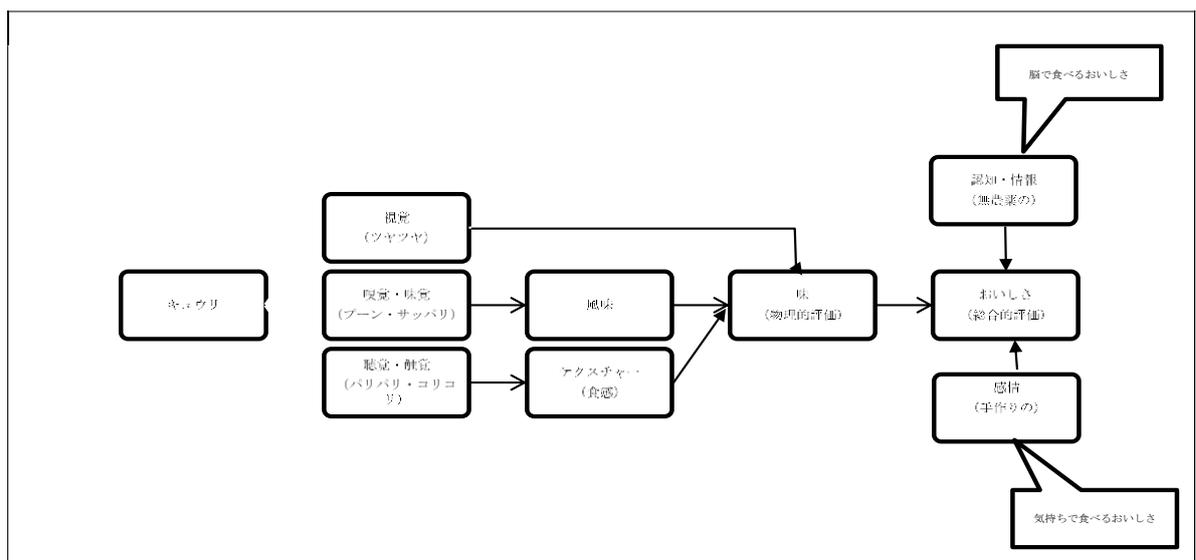
図1：「味覚の共感覚」表現の動機づけ



ただしオノマトペについては、ひとつの語が複数の感覚を同時に表すため、上記とは異なる観点からの意味の整理が必要である。この点について本稿では次の点を主張する。

1. 触覚(例：シコシコ)と聴覚(シャキシャキ)で、テクスチャー(食感)に基づくおいしさ(味覚)を表す。
2. 嗅覚(プンプン)と味覚(コッテリ)で、風味に基づくおいしさ(味覚)を表す。
3. 視覚(ツヤツヤ)は他の感覚とは異なり、むしろ情報・認知に基づくおいしさ(味覚)を表す。

図2：五感とおいしさ(キュウリの場合)



### 5. 孫逸(筑波大学・院)

テーマ：日中感情オノマトペの使用実態について—「笑い」表現を中心に—

要旨：本稿では、「笑い」を表現するオノマトペについて、日本語側と中国語側の使用実態をコーパスでそれぞれ調査し、両言語におけるオノマトペの各用法をまとめる。

日本語におけるオノマトペの語数は中国語や欧米語におけるそれに比べて3倍から5倍ほど多いと指摘されているが、意味範囲を限定すれば、特に多用される感情表現を研究対象にすれば、日本語オノマトペと中国語オノマトペの語数と使用上の差異がどれほどになるかについて、実際にオノマトペを辞書から抽出し、それらがコーパスでの使用実態を把握する。加えて、「笑い」に関するオノマトペがコーパスで現れた用例を利用し、日中オノマトペの用法のバリエーションを検討し、その割合も考察する。

本稿は、日中「笑い」オノマトペの使用実態を調査した上、語構成・文法的用法・意味変化などの観点から、日本語と中国語における「笑い」オノマトペの特徴を捉え、日中オノマトペの相違点を全体的に把握することを目指すものである。

## 6. 刘胭脂 (上海外国语大学・院)

テーマ: 「極限」についての一考察

要旨: 本稿で扱っている「極限」はとりたて助詞の意味記述に用いられる述語である。

「極限」に対する規定は次のようになる。①とりたてられる要素はスケールの極端位置にあり、そのスケールは相対的なスケールで、絶対的なスケールではない。②スケールの上限においても、下限においても、上位事態の程度の高さを表す。③とりたてられる要素と同類要素が共起する述語の肯定、否定が一致するべきである。以上の概念に合わせて、従来「極限」に分類された「さえ」「まで」は再分類をした結果、「最低条件」を表す「さえ」と上位事態の程度の高さを表せない「まで」は「極限のとりたて」から除外されるべきである。

キーワード: 極限、スケール、上限、下限、上位事態、肯否

## 7. 洪安瀾 (閩南師範大学)

テーマ: 日中両言語における空間表現について

要旨: 日中両言語の空間表現を比較するために、本稿では対訳の言語資料のほか、アンケート調査による資料(中国人52名、日本人49名)も研究の対象とした。

アンケートの第一問は参加者に初めて見る図を示し、図にある内容を説明してもらった。日中両国の参加者には8割以上が三軒の店の位置関係を「左→右」か「中央→両側」の順番で説明した。残り凡そ2割が位置関係を紹介していないが、中国人参加者の多くは店の様子を説明したが、日本人参加者は基本的に店の用途を説明してくれた。

第二問では、中国人の参加者に天安門の図を見せ、日本人参加者に東京の図を見せた。中国人参加者の約8割が“人民英雄纪念碑、人民大会堂、天安门、中国历史博物馆”などの建物の位置関係を紹介してくれた。残り約2割が建物の機能を紹介したが、位置関係については説明していない。52名のうち2名が建物の位置関係を紹介してから、その機能をも丁寧に説明した。日本人参加者はほぼ全員が建物の大きさ、色、特徴、影響力、自分自身の経験など図では示していない情報を伝えている。その約4割が「雷門、東京ドームシティ、東京タワー、スカイツリー」を「近い→遠い・上→下」という位置関係で紹介したが。約6割が事物と自分とのかかわりを手係に図を紹介していたように見える。

## 8. 彭广陆 (北京理工大学)

テーマ: 姿勢動詞における視点のあり方——中日対照を中心に

要旨: 「姿勢動詞」は「振舞い動詞」とも言うが、人間の姿勢=体全体の一時的な状態を名付けるものである。彭广陆 (1998)、彭広陸 (2000) によって指摘されている通り、中日両語の姿勢動詞の語彙的な意味には根本的な相違が見られる。つまり、ほとんどの中国語の姿勢動詞の裸の形(“站”“坐”“躺”など)が姿勢の維持を表すのに対して、日本語の姿勢動詞の無標の形=完成相(「立つ」「座る」「横たわる」など)は姿勢の変更を表している。そのため、中国語では姿勢動詞により姿勢の変更を表す場合、“站起来”“坐下”“躺下”のように動詞の後ろに補語という成分を従えるか、“起身”のように動目構造の連語をもって表現しなければならない。これに対して、日本語では姿勢動詞により姿勢の維持を表す場合、「立っている」「座っている」「横たわっている」のように継続相の形を取らなければならない。もちろん、日本語の場合には、姿勢の変更を表すのに単純動詞のみならず、「立ち上がる」「腰掛ける」などのような複合動詞か、「体を起こす」「腰を上げる」「腰を下ろす」「横になる」などのような連語の形で表現することも可能である。

これに関連して、中国語では“坐下”が“坐下来”“坐下去”、“躺下”も“躺下来”“躺下去”という両方の表現が可能であるのに対し、“站起来”は“站起来”への言い換えが不可であることに注目すべきである。このように本発表は、「視点」の立場から中日両語における姿勢動詞の相違を明らかにすることを目的とするものである。

#### [特別講演]

##### (1) 鈴木康之(大東文化大学名誉教授)・迫田(呉)幸栄(二松学舎大学文学部国文学科准教授)

テーマ：語りコトバの重要性

要旨：本発表は、コトバ(言語)は伝達・コミュニケーションの手段であるとともに認識・思考の道具でもあるという基本的な立ちどころから、鈴木が定義する「語りコトバ」について検討する。

話し手と聞き手が相互に話題をやりとりするのが「話し合いコトバ」であり、ある一定の出来事などをとうとうと話しつづけるのが「語りコトバ」である。この両者が共存した形で我々の言語活動にある。語りコトバは、語り手だけではなく、聞き手にも一定の能力が要求される。人間は、話し合いコトバの習得を起点として、その後、何らかの学習を通じて語りコトバを身につけていくのだろう。

発表内容は概ね以下のように構成している。

- 一 コトバのしくみとしての語彙と文法
- 二 話し合いコトバと語りコトバ
- 三 語りコトバの特質
- 四 書きコトバについて
- 五 国語教育での語り教育

##### プロフィール(鈴木康之)

言語学者、言語教育者。大東文化大学名誉教授。民主主義科学者協会・言語部会に参加し、同会の解体後は言語学研究会に入会。同会及び教育科学研究会・国語部会の会員・指導者として活動している。言語研究は言語教育及び社会に還元すべきものとし、国語・日本語教育、手話通訳士の育成にも精力的に従事している。

##### プロフィール(迫田(呉)幸栄)

専門は日本語学・日本語教育(学)。博士(文学)。台湾静宜大学助理教授、公立大学法人名桜大学准教授を経て、現在二松学舎大学文学部国文学科准教授。著書に『現代日本語における分析的な構造をもつ派生動詞』(ひつじ書房、2018年3月)がある。

##### (2) 高橋雄一(専修大学教授)

テーマ：現代日本語の連体形式の副詞節について

要旨：現代日本語の複文において、連用修飾をする副詞節を作る接続形式の中には、下の例のように連体修飾構造がもとになっているものがある。

- 1) 先生になったつもりで教えた。
- 2) 台風が来たために会は中止になった
- 3) 電話で問い合わせたところ、事情が分かった。

これらについては多くの研究があり、内容補充や相対補充といった連体修飾のタイプ、被修飾名詞の種類、後接する格助詞の種類や有無などが論点となって論じられてきた。

筆者はこれまで、「もの」「こと」の主に文末の用法を研究の対象にしてきたが、その中でも、例えば副詞句を作る「不思議なもので、／不思議なことに、」といった形式は上記の問題と関連がある。また、「ところ」を含む接続形式については、日本語学習者の習得の観点からの共同研究をしたことがある。このような研究を踏まえて、筆者の立場からの連体形式の副詞節についての捉え方を示したいと思う。

プロフィール 所属等：専修大学文学部日本語学科 教授 専門分野：現代日本語の文法、日本語教育 経歴：東京外国語大学大学院博士課程 単位取得満期退学。博士(学術)。2008年より現職。1990年代後半から国内外での日本語教育機関での日本語教育の経験がある。主な論文：・(2018)「複合辞の「ものだ」と「ことだ」について 一形式語としての「もの」「こと」の観点から一」、藤田保幸・山崎誠(編)2018『形式語研究の現在』和泉書院・(2019)「形式語「こと」の日本語学習者による習得について」『専修人文論集』104

(3) 王亜新(東洋大学名誉教授)

テーマ：命題とモダリティの視点から見る“怎么”の意味分化とその周辺

要旨：疑問詞“怎么”は「方法」と「原因」という異なった意味を表しているが、その意味分化は話し手が命題に関する主観的立場（モダリティ）の違いに関わっている。一般的に「方法」を表す“怎么”は命題を真とする立場から命題となる事象の実現・経過に関心を持つものに対して、「原因」を表す“怎么”は命題の真偽を問う立場から事象判断の形成と根拠に関心を向けている。そのため、同じ事象でも話し手の主観的立場の変化により「事象命題」と「判断命題」といった性質の異なった命題に分かれて、“怎么”の意味分化をもたらしたのである。その点において“怎么”に伴う文末形態“的・了・呢”の使い分けにも深く関わっていると考えられる。

プロフィール 東洋大学社会学部名誉教授、文学博士 研究分野は中国語学、日本語学、日中対照言語学、特に名詞述語文を中心とした構文形態と意味機能に関する日中対照研究に興味を持つ。

(4) 続三義(東洋大学元教授)

テーマ：日中翻訳——『天声人語』(2017.3.12)を例に

要旨：『朝日新聞』のコラム「天声人語」の中国語訳に関して、これまでは数編の論文で検討してきた。この度、朝日新聞中文網における「天声人語・愛する人への手紙」(2017年3月12日)の中国語訳《献给挚爱之人的书信》(朝日新聞中文網・2017年4月2日)について検討したい。

本論は、基本的に中国語・日本語、および中日一日中の辞書の釈義や説明などを利用し、辞書の相互参照などを通じて、語彙の意味を確認・分析し、これに基づき「訳文」の足りなさを指摘する。主に次のような語彙（「語彙」に関する定義は広い）について検討する。“玩得开心”、“刊物”、“面对面”、“犹如”、“在坊间流传”、“纷纷”、“惰性”、“恶语”、“风景”、“变换”、“经历所带来的冲击”、“不知何时”、“偶尔”、“某”など。その後、“献给～书信”、“恶语及偏见也不绝于耳”、“冲击……弱化”など、語彙にもかかわるが、言葉の組み合わせ——述賓組み合わせ、主述組み合わせなど、いわゆる「連語」の問題について論じ、さらに“我们在这里欢笑时，你也一定在天上与我们一起笑着吧”、“人们纷纷构想着几乎能够与第二次世界大战后复兴相比肩的新国家建设”などの中の“着”、すなわちアスペクト表現の問題に言及し、最後に「翻訳と事実」の問題について簡単に述べる。

プロフィール 北京外国語学院(大学)アジア・アフリカ語学部日本語学科卒業。東京外国語大学外国語学研究科日本語学専攻終了、同文学修士。北京外国語大学卒業と同時に同学で教師となり、講師、副教授、教授を務める。20世紀70年代後半から90年代半ばまでは、中国人に対する日本語教育に努め、その後日本人に対する中国語教育に携わる。日本語動詞のアスペクト研究をはじめ、日本語教育における日本語の音声(発音)、語彙、文法の研究、そして日本人に対する中国語教育の視点から、日中対照言語学的な音声、語彙、文法研究、特に日中翻訳研究、中日辞典の『实用漢日詞典』などの編纂に力を注いできた。